

【佳作】

Take Off again

近藤沙紀（兵庫県 西宮市立西宮高等学校 1年生）

目の前に出てきたタッチパネルでホットコーヒーを注文した伊月は、白い雲海が広がる窓の外に視線を移した。どこまでも続く真っ白な光景を見てみると、昨日までの仕事のストレスを忘れることが出来るのではないかと、と淹れたてのコーヒーをすすりながら思った。そう思ったのも束の間、パネルの右端が青く光る。メールが届いたサインだ。澁々開くとやはり上司からのメッセージだった。確かにプライベートな空の旅を楽しんでいるわけではなかった。

二〇四五年現在、MITコンピュータ科学人工知能研究所に所属する木原伊月は、三八歳独身。新しく建設されたドーム型都市の視察のためサウジアラビアに移動中である。MIT工科大学院を卒業後そのまま研究所に進めば、自分のやりたい研究が思う存分出来ると思っていたのは甘かった。研究所にも上下関係はあり、研究の優先順位も自ずと決まる。最近では、上司からのメールを開く度に気が重くなる。大学卒業後マサチューセッツに渡り一六年が過ぎた。その間、時間を惜しんで研究を続けて来た。

ローガン空港を出発して約二時間、リヤド上空に到着したようだ。B0909の機体の下にランディングスパイアが設置され、

スムーズに地上に降りて行く。見下ろすと、雲が少しずつ薄れていき、細かく切り分けられたような建物らしき物が見えてきた。伊月の隣の席に座っている同じ研究チームのイタリア人アドルフアは、機体を上空から安全に誘導するこのシステムの開発に自分の父親が携わったことを誇りに思っていた。二人は、機体が到着して僅か十五分後にはキングハーリッド国際空港を後にしていた。入国審査に時間を取られなくなったのは、日本のある中小企業と大学との共同開発だったと聞いている。自分も何か結果を残したいという思いが、沸々と湧き上がる。

目的地のドームには、空港から直結のリニアで移動出来るようになっていた。三年後にオリンピックが開催されるイースタンプロヴァンスにもここから一〇分もあれば移動可能だ。改修工事を終えたばかりのプラットフォームの床には黒く光るタイヤが敷き詰められていて、汚れた靴で歩くのがもったいない程だった。間もなくリニアが到着して、降り立つ鳥のように優雅に停車した。「おお。流石サウジアラビア。リニアもLSMだぞ。」

アドルフアは青く澄んだ目を見開いて、国旗の色に因んだ白と緑色の車体に見とれている。列の最後尾だった二人が乗り込むと、ドアが静かに閉まり車体が浮き上がった。音や振動はほとんど感じられない。最高速になっても車内は快適な状態を保っている。目的地が近づき減速したのだろう、窓から街の様子がはっきり見えるようになった。伊月たちを乗せたリニアは、白い巨大な卵に吸い込まれるように、目的地であるドーム型都市に入って行った。

リニアから降りてホームを出ると、美しい街並みが広がって

た。スタイリッシュに洗練された建物。塵一つ落ちていない道路。歩道には精巧な細工が施されたタイルが散りばめられている。スートケースはすでに空港から宿泊先のホテルに運ばれている。アメリカから海外に来たと思えないくらい短時間で快適な旅であった。昼間は六〇度近くになると聞いていたが、飛行機の中から気温の変化を全く感じない。近年の地球温暖化による異常気象は深刻で、欧米でも既に農業生産用のドームは建設されている。しかし都市丸ごとドームにしたのは世界初の試みだ。二人はホテルに入る前に街を歩いてみることにした。近代的な建物は、ここがサウジアラビアであることを忘れさせてしまいそうな程だが、行き交う人々の中にアバカーと呼ばれる黒くて丈の長い衣装を着ている女の人を見かけると、遠く中東の地を訪れていると実感する。

「伊月、アラビックコーヒーは飲んだことあるかい？」

「いや、一度も。」

アドルフアの勧めで、伊月もこの国の飲み物を味わうことにした。通りに面したオープンカフェで、アラビックコーヒーを注文した。アラビア語でガファアと呼ばれるその飲み物は、おちよこのような小さな器に入れて運ばれて来た。砂糖やミルクを入れる習慣はないらしい。小さな器に遠慮がちに注がれたガファアは、アメリカンコーヒーを更に薄めた色をしている。香りはいえ、何かスパイシー。幸いにも一口で飲み終える量だったので、伊月は一気に飲んで空にした器をテーブルに置こうとした。そのときアドルフアが慌てて制止した。テーブルに置くのがマナー違反だと聞かされた伊月は、歩み寄って来たウエイターに空の器を差し出した。こわもてのウエイターは、伊月の器に二杯目のガファアを置いて満足そうに微笑んだ。きよとんと固まっている伊月を見て

アドルフアは大喜びしている。学生時代、友人と中東を旅行したアドルフアは、同じ悪戯にひっかかったそうだ。器を手渡すのは本のだが、おかわりがいらぬときは、器を揺らして返すらしい。何とも複雑なルール。まるでわんこ蕎麦だと伊月は苦笑いしながら二杯目のガファアを飲み干した。大袈裟に器を揺らす伊月を見てアドルフアは笑い転げた。伊月も思わず吹き出して悪戯好きの同僚にリベンジを誓った。

翌日、伊月とアドルフアは、視察団を集めてのレセプションパーティーが催される会場に向かった。入口の自動ドアを入ると、華やかに彩られた大理石のロビーがあった。世界中から各分野のエキスパートが集まるとあって、伊月とアドルフアもいささか緊張気味だ。そのとき、後ろで大きな音がした。振り返ると一人の東洋系の紳士が派手に転んで持っていた書類を辺りにばら撒いていた。伊月とアドルフアは書類を拾いながら、紳士のもとに駆け寄った。彼は、癖のある前髪を掻き上げて眼鏡をかけ直した。その瞬間、伊月の頭の中で、ある光景がフラッシュバックした。

一八年前の日本、大学祭でのことだった。実行委員会の一員として活動していた伊月は、ある重責を担った。四日間に渡り開催される大学祭のフィナーレを飾るメインイベントのスタートボタンを任されたのだ。それまで毎年プロのミュージシャンを招いたライブが看板だったが、初めての試みで当時人気のあったプロジェクションマッピングを企画していた。その発案者が伊月だったからスイッチ担当という流れになったのだ。甲山の頂上に夕日が姿を隠すと、待ちに待ったイベントが始まる。何時間も前から中央芝生は芋の子を洗うような人混みで、所々にビデオカメラが

立っている。伊月は四〇分前からスイッチの横でスタンバイしていた。スタートスイッチと、映像が映し出される時計台とを交互に見つめながらカウントする。観客が沸いている理由はもう一つあった。それはプロジェクションマッピングに合わせた吹奏楽部の生演奏だ。演奏会ではなかなか観られない華やかなパフォーマンスが同時に観られるとあって開演前から熱気であふれている。「まもなく吹奏楽部のパフォーマンスとともに、プロジェクションマッピングが始まります。」アナウンスが流れると中央芝生全体から歓声が上がリ、指揮者が指揮棒を上げた瞬間、静けさに包まれた。伊月は、スイッチに手を置いたまま指揮者の動きに全神経を集中させた。大きく息を吸った指揮者が指揮棒を振り下ろす。同時にスイッチオン。ここで事件は起こった。時計台に大きく映し出される苦の新月が映らない。真つ暗な時計台の前で吹奏楽の演奏だけが響いた。前代未聞、大学祭史上最悪の失態である。このとき流れた嫌な汗を伊月は今も忘れられない。スタッフには永遠にも感じられたあの絶望の時間は、後になってビデオで確かめたところ、僅か一五秒間であった。CDを流す事にしていれば取り返しつかないことになっていただろう。指揮者の機転で一五秒のずれは見事に修正され、吹奏楽の演奏にグリークラブの歌声が重なった。

「風に思う空の翼 輝く自由 マスタリーフオアサービス」

北原白秋作詞、山田耕筰作曲。校歌「空の翼」だ。結果メインイベントは大盛況に終わった。

それから一八年も経った今、日本から遠く離れたここサウジアラビアで、伊月が何故そんなことを思い出したのか。

伊月が入れたプロジェクターのスイッチが作動しなかった瞬間、実行委員会のメンバーは一斉に伊月の手元に目を向けた。時計台前の特設ステージ横で進行を見守っていた実行委員長が、顔色を変えて伊月の所に駆け寄って来た。そして、こけた。次の瞬間、時計台に大きく三日月のシルエットが浮かび上がった。彼は、癖のある前髪を掻き上げて眼鏡をかけ直した。大学祭実行委員長、奥野健一。中学部から伊月の同級である。秀才の彼は、毎年伊月と学年成績トップを取り合った。性格は几帳面にして乱雑、短気にしてスロースターター。要するに頭は切れるがかなり人間くさいと言うか、憎めない奴であった。一八年の時を経て、目の前で転んでいるのは、まぎれもなくその憎めない同級生である。伊月は、手を差し伸べて叫んでいた。

「校歌、空の……。」

彼は驚いて伊月を見上げて、暫く目を細めた後、顔一面にこぼれるような笑顔を浮かべて叫び返した。

「翼！」

広清学院出身でなければ知り得ないこの合言葉を、奥野は覚えていたのだ。伊月と同じ理工学部だった奥野は、そのまま広清学院の大学院環境応用化学科で有機エレクトロニクスの研究を続けた。今は、化学メーカーの研究開発部門にいるらしい。奥野から、やはり中学部、高等部と同級だった横田圭祐もこりヤドに来ていと聞いて、その日の夜、ホテルのレストランで三人集まることにした。

予約したレストランに少し早く着いた伊月と奥野は、窓を夜景が美しく彩る、ゆったりとした席で横田を待っていた。ホテルの最上階にあるこのレストランは床から天井まで届く大きなガラスが一八〇度はめ込まれ、ドーム内にその高さを競い合うように建

ち並ぶ個性的な建物を一望出来た。ここでは、外の暑さも、膨大に増加する人口が及ぼす食糧危機も無関係だった。

「まるでノアの方舟だな。」

伊月は咬いた。

「高い金を払える人間だけが生き残れる。」

奥野が吐き捨てるように言った。

しばらくすると、ひよろりと背の高い男性が入って来た。横田だ。横田は伊月たちを見つけると、満面の笑みを浮かべてやって来た。人懐っこい笑顔はあの頃のままで。

「うわあ、久しぶりだな、二人とも。」

「まさかサウジアラビアで再会するとは思わなかったよ。」

「横田、今どこに居るの?」

「イギリス。高校卒業後、一浪して京阪大学医学部に入ったのは知っているだろ?京大在学中、オックスフォード大学のインターンシッププログラムに参加して、博士課程への進学を決めたんだ。今はラドクリフ病院に籍をおいている。勿論ここへは視察団の一員として派遣された。ドーム型都市が人体に及ぼす影響は今後の課題だからね。」

「そうかあ。二十年前は、まだうちの大学に医学部がなかったからなあ。」

「オックスフォードと大学間の連携は当時からあったみたいだけだな。今も留学の受け入れはスムーズらしいよ。そういえば、昨年は創立一五〇周年だろ? 奥野は、式典とか行ったの?」

「うん。たまたま関西に居たから行って来た。先生方にもいっぱい会えて懐かしかったよ。中学のときの北村先生、喋り方全然変わってなかったぞ。」

「歳、聞いた?」

「うん。まだ一八歳だった。理科の大友先生、覚えてるだろ?」

「ああ、怖かったよなあ、美人だけど。特に男子にきつかった気がする。」

「ハハハ。大友先生の厳しい指導のおかげで、俺たち三人とも理数畑でめしが食えてるわけだ。怖かったといえは、川田先生。普段は優しいけど、全校駆け足の後とか礼拝のときにふざけて、よく怒鳴られたよな。声も体もでかいから、迫力あって、怖かったあ。」

「川田先生も来られてたよ。今でも、でかかった。同級生では、山本、竹下、駒田、向井……。そうそう、中二の時同じクラスで勉強嫌いの永井武つていただろう。校長面接呼び出しされまくってた。あいつ今まさかの教師だぞ。中学部で教えているらしい。今年も無人島キャンプ行って蟬食べたってさ。」

「おお! 三八になって、無人島キャンプはきついなあ。ピアノがうまかった山川美咲は、プロになったんだらう?」

「大阪で行われた記念音楽祭のスペシャルゲストで演奏したらしいよ。残念ながらそっちは行けなかったが。」

「大川製薬の新社長、確か俺たちと同級の大川の兄貴だろ?」

「ああ。新社長になって直ぐ、後援会で寄付の窓口を作って、発展途上国への医薬品援助の取り組みを始めたそうだ。日本酒造では、図書部で一緒だった武本先輩が専務取締役になっているらしい。商売のかたわら、西宮の宮水を守るべく奔走していると聞いたよ。」

「学生の頃は、マスターオブアサービスって何?って、ぴんと来なかったけど、今なら分かる気がするな。」

三人は異国の地から、夜がふけるまで、上ヶ原を懐かしんだ。

街の灯りが少しずつ消えていく。席を立つ前、奥野が窓の外を指さした。

「この街には、月が出ないな。」

奥野の指の先をたどると、墨で塗りつぶされたように真っ黒なドームの天井が広がっていた。

「ほんとだな。」

横田も、寂しそうにうなずいた。

伊月は昨日まで、自分の中に得体の知れない苛立ちを抱えていた。それは、四〇歳を前にした焦りのようなものだったと思う。奥野、横田の二人と別れ、宿泊先のホテルへの道を歩きながら伊月は上を見上げた。頭上に覆いかぶさるドームの天井を見つめて一人呟いた。

「ここには、空がない。」

人類の未来に、空を残したい。科学者として、伊月は心の底からそう思った。

「僕は、何を焦っていたんだろう。自分一人の力で、一体何が出来ると思っていたんだろうか。」

学生時代を共に過ごした仲間達が、世界のあちこちで活躍している。世界中を飛び回る空の翼。

「僕は、その中の一つだ。」

そう思うと、急に心が軽くなった。

リヤドを発つ直前、上司からのメールが届く。帰国したら直ぐに今回の視察の報告書を提出しろとの内容だった。仕事のメールで気が重くなる事はもうなかった。伊月は既に書き上げた報告書を研究所所長はじめメールを送ってきた直属の上司まで、一斉に

送り、明日にでもプレゼンテーションの機会をもらえるように、申し出た。帰国後は今まで以上に忙しくなる。一六年前に関西空港を出発したあの日と同じ熱い思いを胸に、伊月は再びアメリカの空に向かって飛び立った。

終

※作中に登場する校歌「空の翼」は関西学院の校歌です。